

第一次大戦後の中国興業銀行の発展（1918-1920年）（上）

篠 永 宣 孝

はじめに

第一次大戦が終結して平和が回復し通常の生活が戻ると、世界においてと同様フランスにおいても経済活動の復活がもたらされた。フランスにおいても、ヨーロッパにおいても、戦後復興のための資材・工業製品、工業原材料、農業製品・食料などが大いに不足していた。1919年のにわか景気〔boom〕は、あらゆる物価の高騰と商品への投機から一挙に沸き起こった。例えば、「インドシナの米、インドの油脂、中国の絹などの価格は2倍に上昇し、ときにはこの上昇率をはるかに超えた」⁽¹⁾。他方で、1919年初頭におよそ4.5フランであったインドシナのピアストル〔piastre〕は、同年末には11.25フランに高騰し、一年間に150%以上もの差額をもたらした。「実際、1919年の特徴はフランに対する極東のすべての外国為替〔devises〕の激変〔高騰〕であった」⁽¹⁾。このような戦後の経済活動の再開（にわか景気）に鼓舞されて、中国興業銀行〔BIC〕総支配人J.ペルノットは、とりわけ、極東ばかりでなくヨーロッパやアメリカの大貿易港にも支店網を拡張し、国際貿易によりこれら諸支店を連結する新興海運会社を支援するという予てからの計画の実現に邁進することになった。

第一節 中国興業銀行〔BIC〕支店網の世界的拡張

戦争が終結した時、すでにBICは中国やインドシナに8支店——北京、上海、天津、香港、サイゴン、ハノイ、ハイフォン、雲南府——を所有していた⁽²⁾。J.ペルノットによると、「1919年はとりわけ準備の期間である。この年に開設された支店は、極東では広東支店と福州支店、フランスではマルセイユ支店である。マルセイユ支店の開設は何にもまして是非とも必要であった。マルセイユは極東への玄関口であり、極東-フランス間貿易に向けられる大部分の商品が集積されるのがマルセイユだからである。マルセイユは、アジアに向け出

国し、あるいはアジアから帰国するフランス人の絶え間ない流れ〔flot〕が到達する所である。したがって、この地での出店は物質的・道義的の必要〔nécessité à la fois matérielle et morale〕に応えるものであった⁽³⁾。

1920年はBICにとって出店ラッシュを記録した。すなわち、横浜(3月11日)、シンガポール、漢口(4月15日)、盛京〔奉天〕、汕頭、済南府など極東・アジアに6支店、リヨン、ボルドーなどフランス国内に2支店、ロンドン、アンベルス(アントウェルペン)などヨーロッパに2支店、アメリカのニューヨークに1支店と、一挙に11もの支店を開設したのである⁽⁴⁾。フランスの銀行の中で戦後日本への初出店となる横浜支店は、リヨン支店やニューヨーク支店の開設後に、これら支店を補完するものとして開設された。リヨン・ニューヨークの二都市と横浜との貿易関係は、特に絹貿易にとって、重要であった⁽⁵⁾。

J. ペルノットはこれらの支店の重要性について次のように説明している。「リヨンでの支店開設は是非とも必要であった。リヨンは極めて活動的であり、極東との関係は一世紀以上にもさかのぼるが、そのリヨンには、日英両国間の仲介者として、香港上海銀行と横浜正金銀行の二つの外国銀行が存在するのみであった。両銀行のそばに席を占めることによって、BICは、空白を埋めるばかりでなく、自身のための大規模な活動中心地を築き上げた⁽⁶⁾」のである。

ニューヨーク支店については、BICはそこに支店することを認められたフランス唯一の銀行であった。「戦争によって、かつては極東-ヨーロッパで行われていた輸送の大部分はアメリカへと向きが変わった。その結果、ニューヨークはアジア市場取引の決済においてロンドンのライバルとなった。したがって、BICにとってそこに自身の支店を持つことは極めて大きな利益であった。ニューヨークはかなり重要な中国居留民を擁しているのが銀行の名前と特徴を印象付けるに違いないという事実によって、この利益はさらに増大した。実際、ニューヨーク支店には間もなくこれらの中国人顧客がやってくるようになった⁽⁷⁾」のである。

シンガポール支店と漢口支店は、国際的な経済活動の重要な中心地にある。J. ペルノットによると、BICにとって盛京〔奉天〕・汕頭・済南府支店の重要性は少なかったが、BICは「これらの地に出店した、フランスばかりでなくヨーロッパの最初の銀行であり、外国の競争相手としては日本の銀行しかなかった」と⁽⁸⁾。また、『フルニエ通信〔Agence

『Fournier』の報じるところによると、「満州の旧都である盛京〔奉天〕は、シベリアと日本を結ぶ鉄道線上に位置し、ここ数年来拡大し続けて大規模な商業中心地となった。シベリアの騒乱とそれに起因するハルピンの困難な出来事以降、盛京〔奉天〕は満州の一大市場となった。中国南部の汕頭港は、香港の北東 200km に位置し、とりわけフランス領インドシナ植民地との交通の要衝である」⁹⁾。

ボルドー支店の必要性はそれほど明らかではなかったが、J. ペルノットによると、ボルドー支店は、BIC が出店した極東との関係を発展させるために欠かせないものであった。すなわち、BIC ボルドー支店の目的は、地方の商工業をアジアが提供するであろう歴大な販路〔débouchés〕へ導いてゆくガイド役を務めることであった。しかも、「わが国南西部のぶどう栽培者〔viticulteurs〕や蒸留酒製造業者〔distillateurs〕はもはや戦前の大部分の市場を当てにすることができなくなってしまったので、それはますます貴重なものとなった」¹⁰⁾のである。

ロンドンには常に「世界の手形交換所〔le clearing-house du monde〕」であり、「極東に出店した銀行にとって、この地に店舗を持つことなく本格的な発展を構想することはできなかった」¹¹⁾のである。最後に、15世紀末ヨーロッパ第一の国際貿易港アンベルス（アントウェルペン）は、アジアとベルギーの交通輸送の中心地である。

こうして、1920年末には、BIC はパリ本店のほか内外に 23 支店を擁するフランス第一

表 1 中国興業銀行〔BIC〕支店の地域別分布（1920 年末現在）

地域	店舗数	支店〔開設年〕
中国	11	北京 [1913/9]、上海 [1914/7]、天津 [1916/1]、香港 [1917/4]、雲南府 [1918/3]、広東 [1919]、福州 [1919]、漢口 [1920/4]、盛京 [1920]、汕頭 [1920]、済南府 [1920]
東シベリア	1	ウラジオストック [1919]
日本	1	横浜 [1920/3]
インドシナ	3	サイゴン [1917/7]、ハイフォン [1918/2]、ハノイ [1918]
海峡地域	1	シンガポール [1920]
フランス	3	マルセイユ [1919]、リヨン [1920]、ボルドー [1920]
イギリス	1	ロンドン [1920]
ベルギー	1	アンベルス [1920]
アメリカ合衆国	1	ニューヨーク [1920]

[Source : AN, 65AQ, A366¹⁻² (BIC); A.-J. Pernotte, *Pourquoi et Comment fut fondée la Banque Industrielle de Chine*, Paris (Jouve), 1922, pp. 47-52]

級の世界的銀行へと発展したのである。世界に張り巡らされたBIC支店の地域的分布(1920年末現在)は次のごとくである(表1参照)。

これに加えて、1921年初頭にBICは新たに5店舗(バタヴィア、プノンペン、ロッテルダム、ダンケルク、ルアーヴル)を開設する準備を行っていた⁰²。「フランス北部の金属工業——ダンケルクはその輸出港——は、もっぱら利用される筈の新鉱床[の発見]で富んでいたのに、ダンケルクの出店はなおさら貴重なものになるに違いなかった。ルアーヴル港については、すでにフランスのアジア交易(米、コーヒー、ゴムなど)の拠点となっていた⁰²。かくして、これら5支店は1921年中に順次操業してゆくことになるのである。

しかしながら、「BICによるこうしたフランス、ヨーロッパ、アメリカの港市への出店は、現地の銀行〔banques locales〕に対する競争の企てと見た敵対者たちから多くの非難を巻き起こした」⁰³。とりわけ、BICの海外での直接の競争相手であるインドシナ銀行〔BI〕やパリ国民割引銀行〔CNEP〕は、BICのこうした急速な出店と営業活動の世界的拡張を好意的な目では見ていなかった。インドシナ銀行のBICへの悪感情〔animosité〕についてはすでに多々触れてきたので、ここではパリ国民割引銀行の場合を説明してみよう。

外国市場においてフランスの銀行の中で常に第一位の地位を築いてきたパリ割引銀行〔CEP〕は、1889年の破綻と再建(パリ国民割引銀行)以来、極東とアメリカの事業から順次撤退してゆき、世紀交替期に海外支店数は4支店にまで減っていた。パリ国民割引銀行〔CNEP〕は「税務上の理由から」残りのこれら支店も徐々に閉鎖してゆき、1904年までにニューヨークの代表部〔représentation〕を残すのみとなっていた⁰⁴。ところが、第一次大戦後すぐさま、CNEPは外国や植民地での活動を再開し、加速度的に拡大させる固い意志を表明した。海外関係において「アメリカは常に第一の地位を占めていた」⁰⁴ので、CNEPの活動はまず初めにアメリカの大市場に向けられた。かくして、CNEPは、アメリカの大銀行「国立商業銀行〔National Bank of Commerce〕」(ニューヨーク)と「第一国立銀行〔First National Bank〕」(ボストン)の協力の下に、1919年7月に新銀行「仏米銀行〔French American Banking Corporation, FABC〕」(アメリカ国籍)を設立した。「アメリカの銀行がフランスに向け拡張の好適地を探していたとき、正に同じことを、仏米両国間の商業・金融関係を促進させる機関〔FABC〕によって、アメリカで直接にフランスの利益に奉仕することができるに違いない」⁰⁵とCNEPは考えた。「こうして強力な資本

家のグループによって創設された仏米銀行〔FABC〕は、経済面における仏米接近の新たな媒介手段〔instrument〕として出現した。それは、両国利益が合致するよう貿易と金融取引を助長するために、それぞれの行動手段や経験や組織力を共有する、アメリカの二大銀行とフランス金融機関との間の恒常的な協同作業〔collaboration〕である⁰⁵。かくして、CNEPには、BICによるニューヨーク支店やロンドン支店の開設後、BICの拡張や競争を懸念する尤もな理由があったのである。

第二節 資本の増強と事業の展開

支店網の拡張とそれに伴う事業の拡大に備えるために、BICは早急に資本金の増強に取り組まねばならなかった。もっとも、支店網の拡張は各支店の地で現金〔argent liquide〕（預金）を調達するという目的をもっていただけども、BICは益々重荷となってきた資本の固定化——産業金融参加〔participations financières et industrielles〕、大部分は未支払いのままの中国国庫債券と交換に行われた中国政府への貸付金、支店の固定資産（土地、建物など）——に対処する必要に迫られていた。したがって、BICは固有の資金（資本金など）で財政基盤を強化せねばならなかったのである。

BICは、すでに戦時中の1917年12月に、当初株式（9万株）の二回目の四分の一（125フラン）払込みを求め、翌年2月15日にその払込みが完了していた——これによりBICは1125万フランを調達した——⁰⁶。

続いて、1918年10月25日に開催のBIC取締役会は、新株6万株（二分の一払込み）の発行により資本金を4500万フランから7500万フランに増額することを決定した。この議決に基づいて、BICは1919年4月に第一回目の増資（3000万フラン）を行った。額面価格500フランの新株6万株が、一株515フランの価格で販売され、1919年5月7日までに中国政府をふくめ1265株主によって引き受けられた⁰⁷。BICの第1回目増資の主要な応募者は、新株の三分の一（2万株）を引き受けた中国政府⁰⁸を筆頭に、フランス中央銀行〔Banque Centrale Française〕⁰⁹の4793株、サロモン・ファン・ダイク〔Salomon Van Dyck〕⁰⁴の4599株、J. ペルノットの2300株、などであった。この増資によって、BICは総額1590万フラン——新株の二分の一の払込みで1500万フラン、一株当たり15フランの発行プレミアム〔prime〕で90万フラン——の運転資金を獲得した。

また、この増資を機会に、BICは再度株式のパリ証券取引所への上場を企てた。1919年4月、パリ駐在中国公使胡惟徳〔Hoo Wei Teh, Hu Wei-tê〕は、BICの上場認可を求めて、仏外相S. ピション〔S. Pichon〕に次のように書き送った。「中国政府は、BIC創立資本金の三分の一を出資して以来、BICを中国・フランス両国間の経済発展と相互利益のための掛け替えのない機関と見做してきた。そして、今回の増資においても、中国政府は新株の三分の一を応募した。同行は、今日まで同行株式のパリ証券取引所への上場認可の要請を差控えてきた」²⁰。だが、中国政府によると、BICによるこの上場認可要請の差控えは、中国での融資・資本参加などによって同行に与えられている声望〔prestige〕と一致しないように思われる、と。こうした中国政府からの要請を受け、早速、ケ・ドルセは、「当該上場について極めて好意的な意見」²¹を付して、中国公使の書簡を大蔵省に転送したのである。かくして、中国政府やBICによる働きかけがようやく実を結び、BIC株のパリ証券取引所への上場は1919年度中に実施されることになったのである。

第一回目増資のすぐあと、1919年11月28日に開催されたBIC臨時株主総会は、同取締役会に、一回または数回に分けて、資本金の7500万フランから2億5000万フランへの増額を承認した。この承認に基づいて、BIC取締役会は、同日に、額面500フラン（二分の一払込み）の新株15万株を——株式引受時のプレミアム付きで——発行することによって、資本金を二倍の1億5000万フランに増額することを決定した²²。この第二回目の増資では、発行プレミアムは1株当たり165フランと決められたので、BICは総額2475万フランもの発行プレミアムを得ることになる（第二回目増資は1920年2月に行われる）。

BICが当て込んだこの大きな発行プレミアムの獲得は、戦後のBICの好調さを如実に反映していた。実際、フランスの多数の新聞・業界紙は、BICの戦後の状況を「繁栄の絶頂〔en plein épanouissement〕」にあると絶賛していた²⁴。例えば、『デフォッセ相場〔Cote Desfossés〕』紙は次のように報道していた。「もし、銀行業界の中で、活動や活力の方法〔méthodes d'activité et d'énergie〕を得ることができる事例を探さねばならないのであれば、その最も代表的なケースとしてBICの事例を挙げざるを得ないであろう。というのは、BICは設立以来6年間の活動で、十分に満足のいく状況を築き上げることができたばかりでなく、当面豊かな将来の可能性をも秘めているのであるから」²³と。また、『アンフォルマシオン〔Information〕』紙はまぎれもなく次のように書いていた。「外国に進出し

た我が国の銀行の中で、BICほど、その検討〔l'étude〕はより喚起力に富み、フランスの影響力という点から見てその事業〔l'oeuvre〕は実のよりよい豊かさを予測させるものはない。・・・もしBICが1913年に設立されていなかったならば、フランスは中国で政治的利益に奉仕するための活動手段〔moyen d'action〕をほとんど欠いていたであろう²⁸と。そして、遂には『金融活動〔Vie financière〕』紙における熱狂的賞賛が見られる。すなわち、「BICの星は、かつてないほどの光彩を放って光輝いている」²⁹と。BICへのこうした称賛の言葉は、BICの創業以来の、とりわけ戦後（1918～1920年）の目覚ましい発展を反映していたのである³⁰。

表2は、1913年の創業から1920年までのBIC貸借対照表〔Bilan〕（主要取引勘定）の変化を示している。BIC創業以来、全ての取引業務において飛躍的な発展を遂げているのが一目瞭然であろう。すなわち、BICの貸借対照表総額は、1913年の5500万フランから1920年6月の16億5070万フランと七年間に30倍に、休戦直後の1918年から1920年6月の僅か二年足らずの間に4倍以上に拡大した。預貯金残高〔Comptes courants à vue et de dépôts〕は、1914年の110万フランから1920年6月の8億9830万フランへと六年間で実に817倍に——休戦直後の1918年から1920年6月の二年足らずの間に5倍以上に——激増し、銀行の顧客数〔口座数〕も1914年の124口座から1919年に2万564口座、そして1920年にはおよそ3万口座にも達した³¹。保有商業手形〔Portefeuille-effets〕は、1916年の888万フラン、1918年の6529万フランから1920年6月の4億3398万フランへと、四年間で実に49倍、戦後二年間でも6.6倍に増大した。保有株・資本参加〔Portefeuille-titres, Participations financières〕も、1916年の604万フラン、1918年の1306万フランから1920年末の1億8235万フランへと、四年間で30倍、戦後二年間で14倍に——とりわけ1920年6月（5923万フラン）から1920年末の激増は驚異的で、僅か半年間で実に3倍に——拡大した。また、諸貸付〔Comptes avances diverses〕も、1913年の534万フラン、1918年の1億1223万フランから1920年末の3億785万フランへと、七年間で58倍、戦後二年間でも2.7倍に増大した。かくて、BICの純益〔bénéfice net〕は、1914～1917年の200～300万フラン程度から、1919年には最大の1624万フラン——1920年上半期は2267万フラン——にまで増大したが、1920年末には70万フラン以下に下落した³²——1920年下半期の急激な業績悪化が窺われる——。

表2 中国興業銀行の主要取引勘定の発展 (1913～1920年) (単位:100万フラン)

年度 31déc.	資産 = 負債 合計	商業 手形	株保有・ 資本参加	貸付	利益		預貯金	口座数	配当率
					粗	純			
1913	55.0	12.2		5.3	0.6	0.3	-	-	-
1914	98.8		5.3	31.6	4.5	3.4	1.1	124	8%
1915	100.0		6.6	27.8	3.0	2.1	5.1	449	8%
1916	162.3	8.9	6.0	43.9	4.0	2.3	20.4	3,086	8%
1917	247.6	47.4	10.3	64.6	5.7	2.9	73.1	5,045	10%
1918	380.4	65.3	13.1	112.2	11.1	6.0	173.2	10,558	10%
1919	1089.7	235.5	25.4	282.6	30.0	16.2	675.7	20,564	14%
1920 30juin	1650.7	434.0	59.2	295.7		22.7	898.3	(30,000)	
1920 31déc	1548.9	230.8	182.4	307.8		0.7	855.4		

[Source : AN, 65AQ, A366¹⁻² (BIC) ; Rapport d'A. Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921 et Rapport de Jules Jeanneney au Sénat du 16 février 1922 (N° 99), MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 63-161 et vol. 99, folio 146-166, notamment 151-152]

1919年下半期から1920年度上半期においては、BICのアジア・極東などの海外諸支店においても業績はとりわけ好調であった。表3は、1920年上半期のBIC諸支店の営業収支〔résultat〕を表している。

表3 中国興業銀行 (BIC) 本店と諸支店の営業収支 (1920年上半期)

	現地通貨	損失 (フラン)	利益 (フラン)
本店		10,130,328.82	
パリ		1,505,594.87	
マルセイユ			1,136,219.13
リヨン			198,117.85
アンベルス		141,879.04	
ロンドン	£ : 1525/14/9		80,000
ニューヨーク	\$: 44,293.53		538,166.40
北京	T : 50,909.40		610,912.80
上海	T : 494,209.71		6,029,358.45
天津	T : 4,351.52		57,657.46
香港	\$: 22,954.82	199,706.95	
サイゴン			22,656,163.50

ハイフォン	\$:	311,570.31		2,804,132.79
雲南府	\$:	498,449.88	3,239,924.22	
ウラジボストク				
広東	\$:	35,616.05	320,544.45	
福州	\$:	25,436.07		216,206.60
横浜	¥ :	581,371.81		3,488,231.04
シンガポール	SST :	111,226.89		611,747.90
奉天				
漢口	\$:	8,106.95	98,094.09	
汕頭	\$:	14,073.43	119,620	
合計			15,755,692.44	38,426,913.92

〔この数値にサイゴン支店での積立金 1000 万フラン（1919 年 12 月 31 日）と積立金 3000 万フラン（1920 年 6 月 30 日）は含まれていない。〕

〔Source : Résultat des Agences pour le 1^{er} semestre 1920, AHCA (CL-Agricole), FBI, 439AH949〕

表 3 によると、BIC 本店の 1013 万フラン、パリ支店の 151 万フラン、雲南府支店の 324 万フランなどにおいて大きな損失はあったものの、サイゴン支店の 2266 万フラン（プラス 4000 万フランの積立金）もの巨額利益の計上を筆頭に、上海支店の 603 万フラン、横浜支店の 349 万フラン、ハイフォンの 280 万フラン、マルセイユ支店の 114 万フラン、シンガポール支店の 61 万フラン、北京支店の 61 万フラン、ニューヨーク支店の 54 万フラン等々の利益を出し、海外支店は極めて業績好調であった⁹⁹。それゆえ、BIC の 1920 年度上半期の損益は 2267 万フランもの黒字であった。

こうした BIC 創業以来の好調な業績を背景に、BIC は株主への配当金（率）も 1914～1916 年は 8%、1917～1918 年は 10%、そして 1919 年には 14%、等々と高い配当率を継続することができたのであった（表 2 参照）。以上のような諸指標（数値）が明瞭に物語っているように、BIC は創業の 1913 年から 1920 年上半期に至るまで、ある意味では驚異的な発展を実現していたのである。だが、1920 年下半期に至って大きな試練を迎えていたことが見て取れるであろう。

1920 年上半期までの業績の好調さを反映して、BIC の株価も急騰した（表 4 参照）。とりわけ、1919 年以降の株価の高騰はある意味では投機的で、1920 年 1 月すでに 900 フランに達していた株価（額面 500 フラン）は、新株の応募開始（1920 年 2 月 2 日～18 日）

直前の2月1日には929フランにまで上昇し、新株発行（応募価格665フラン）後の3月1日には889フランと若干下落したものの、それ以降1920年6月1日の1165フランの頂点に達するまで株価は高騰しつづけた⁶¹⁾——それ以後株価は漸落し、1920年12月には急落したが、翌年1月初旬にやや持ち直した——（表4参照）。

表4 BICの株式相場（1920年1月～1921年1月）（単位：フラン）

日付	株価（フラン）
1920年1月	900
1月29日	920
2月1日	929
2月2日～18日	新株応募価格 665
3月1日	889
4月1日	940
4月26日	1070
4月27日	1120
5月1日	1120
6月1日	1165
6月2日	1160
7月1日	1105
8月1日	985
9月1日	960
10月1日	905
11月1日	850
12月1日	814
1921年1月1日	667
1月5日	675
1月6日	695
1月7日	715
1月8日	723
1月10日	735
1月11日	738
1月12日	741
1月13日	— (plus coté)

[Source : "Cote du jour" du 28 avril 1920 et du 3 juin 1920, "Information" du 7 février 1921, "Activité Française et Etrangère" du 1^{er}-15 avril 1922, AN, 65AQ, A366²(BIC)]

BICが1920年2月2日～18日に新株15万株発行による増資（7500万フラン）に踏み切ったのは、まさに1920年初頭のこうした株式市場の好調さを利用してであった。この新株15万株（半額の250フラン払込み）は、一株当たり665フラン（実質払込み415フラン）で発行され、3542名の株主（個人、企業、中国政府など）によって引き受けられて、大きな成功を収めた。そして、1920年5月7日のBIC株主総会は、資本金1億5000万フランへの第二回目増資を承認したのである。新株15万株の応募状況（分布）は次のようであった⁶³。

パリ支店 [Agence de Paris]	72,418 株
極東諸支店 [Agences d'Extrême-Orient]	71,867 株
新設諸支店 [Agences de création récente]	5,692 株
合計	149,977 株

かくして、BICは、この第二回目増資によって、総額6225万フラン——新株15万株の二分の一払込みで3750万フラン、一株当たり165フランの発行プレミアム [prime] で2475万フラン——もの巨額資金を獲得することができたのである⁶³。ちなみに、第二回目増資株の三分の一（5万株）を応募したBIC最大の株主である中国政府は、総額2075万フランの払込金——新株5万株の二分の一払込みで1250万フラン、一株当たり165フランの発行プレミアム [prime] で825万フラン——を次のようにして支払った（表5参照）⁶⁴。

表5 中国政府による第二回目増資の応募株（5万株）への払込み

2系列の1920年金5%欽渝債 [Bons Ching-Yu 5% Or 1920]	
(1920年3月16日支払)	14,000,000 フラン
現金 (1920年3月16日支払)	2,250,000 フラン
中国銀行 [Bank of China] 宛小切手 (1920年4月16日支払)	2,250,000 フラン
中国銀行 [Bank of China] 宛小切手 (1920年5月18日支払)	2,250,000 フラン
合計	20,750,000 フラン

[Source : Lettre de G. Maspero à M. Poincaré du 9 janvier 1923, MAE(SE, AO), Chine, vol. 387, folio 192.]

表6はBICの第二回目増資における主要応募者と応募株数を示している⁶⁵。第二回目増資の上位26名の大口応募者は、全応募者数（3542名）の1%（0.7%）にも満たなかったのに、合計で11万5608株を応募して発行新株全体（15万株）の実に77%——5万株（33%）を

応募した中国政府を除外しても、全体の44%——も占めていた。換言すれば、第二回目の新株発行も、1913年の創立株への応募のときと同様に、極めて少数の株主によって独占的に引き受けられたのである。また、第二回目増資の応募者のリストの中には、BICの直接関係者（取締役・支配人・支店長・幹部職員など）——A.-J. ペルノット（6,886株）、A. ベルトロ（1125株）、P. ボレル（935株）、B. アダン（500株）、廖世功（400株）、E. アンリ（63株）、ルネ・ド・セランヴィル（112株）、ジェラルド・ド・ガネ伯（112株）、P. ショタール（100株）、J. ペルシヨ（79株）、A. マテール（200株）、メルラン（100株）など——やその家族・親族・友人などの名前——Ch. ラングロワ（450株）、D. ベルトロ（82株）、R. ベルトロ（50株）、M. カズナーヴ（100株）など——、あるいはBICの協力者・協力会社〔collaborateurs〕——フランス中央銀行〔BCF〕（25,859株）、北京シンジケート（7,902株）、イタリア商業銀行〔BCI〕（3,624株）、L. ヴォワラン（200株）、レオン・ド・モントルイユ（294株）、ジャン・ド・フェロル伯（100株）など——や政治家・政商〔politiciens affairistes〕——L. ムジヨ（552株）、ルネ・ベナール（200株）、ラザール・ヴェイエール（107株）など——が数多くみられるのも第二回目増資の応募者の特徴である（表6、表7参照）。こうしたことから、BICは不正な応募〔souscriptions irréglières〕あるいは「情実応募〔souscriptions de complaisance〕」——すなわち、「びた一文も払わずに〔sans bourse délier〕、応募価格（665フラン）と取引所〔Bourse〕での取引相場との差額によって利益を実現する」⁶⁹——を行ったとして、後に非難されることになるのである。実を言えば、このようなことは業績好調の——あるいは、好調とみなされている——企業においては、実際しばしば行われることであった。増資の際には、かなりの数の新株はそうした人たちに留保されていたからである。増資の際、「彼らは、彼らの口座の借方に記入してもらうことで新株への払込みを行い、証券取引所でそれを売却し、その売却金を貸方に記入してもらって、利益を受け取る」⁶⁹という操作〔opération〕が広く行われていたのである。

表6 BIC 第二回目増資（1920年2月）の主要応募者と応募株数

主要応募者名	応募株数
Gouvernement chinois	50,000
Banque Central Française	25,859
Peking Syndicate	7,902
A.-J. Pernotte, directeur général de la BIC	6,886
Salomon Van Dyck, gros spéculateur et importateur d'alcools	3,927
Banque Commerciale Italiana (Milan)	3,624
Banque des Colonies (Bruxelles)	2,500
Banque Hollando-Américaine	2,165
Charles Aymard	1,300
Comte Eugène Mathéus	1,128
André Berthelot, président de la BIC	1,125
M ^{me} Lemoine	1,100
Pierre Borel, directeur de l'Agence de Paris de la BIC	935
Paul Raussy (Marseille)	800
Société Industrielle et Financière des Colonies	700
Albert Gallusser, fondateur de la SMCP (juillet 1918)	625
Léon Mougeot, ancien ministre	552
Thomen Otto (John), banquiers (New-York)	530
Camille Aymard, administrateur de sociétés indochinoises	500
Edouard Worms, administrateur de sociétés indochinoises	500
Louis Bernard, banquier	500
Frenz Kolhy, directeur Siège Social de la BIC	500
Basile Adam, inspecteur général de la BIC	500
Société d'Exportation Industrielle	500
Paul Ville (Marseille)	500
Charles Langlois, directeur des Archives Nationales	450
Total	115,608

[Source : "Messager de Paris" du 27 octobre 1921, ABF, chemise (Affaires de la BIC) ; AEF, B31597(BIC, Correspondance, N°173 ou 204)]

表 7 BIC 第二回目増資（1920 年 2 月）の代表的中小応募者と応募株数

代表的中小応募者名	応募株数
Liao Sze Kong, vice-président de la BIC	400
Eugène Henry, vice-président de la BIC	63
René de Cérenville, administrateur de la BIC	112
Comte Gérard de Ganay, administrateur de la BIC	112
Paul Chautard, administrateur de la BIC	100
Justin Perchot, administrateur de la BIC	79
André Mater, avocat-conseil de la BIC	200
Merlin, avocat de la BIC	100
Daniel Berthelot, frère d'A. Berthelot	82
René Berthelot, frère d'A. Berthelot	50
Maurice Casenave, ministre plénipotentiaire (N-Y), ami de P. Berthelot	100
Tai Ming Fou, secrétaire de la Légation de Chine à Paris	200
Pierre Meilhan	305
Léon Voirin, président de la BCF [Banque Centrale Française]	200
Baron Léon de Montreuil, administrateur de la BCF	294
Comte Jean de Férol, administrateur du Peking Syndicate	100
Albert Brunschweiler, collaborateur et beau-frère d'A. Gallusser	250
Baron de Gunzbourg, maison J. de Gunzbourg	100
René Besnard, sénateur	200
Lazare Weiller, sénateur	107
Maurice Mignon, publiciste	250
Léon Rénier, publiciste	200
Henri de Saint-Albin, publiciste	125
Georges Manchez, publiciste	100
Raymond Recouly, publiciste	21
Charles Humbert, publiciste de "Journal"	50
Société Maritime et Commerciale du Pacifique (SMCP)	350
Société Maritime et Commerciale de France (SMCF)	166
Bénard Frères et C ^{ie} , banquiers à Paris	125

[Source : "Messager de Paris" du 27 octobre 1921, ABF, chemise (Affaires de la BIC) ; AEF, B31597(BIC, Correspondance, N°173 ou 204)]

ちなみに、ここでは、BICの1920年2月の第二回目増資前後に行われた頭取A. ベルトロの株取引〔opérations〕を事例として挙げてみよう。BIC頭取は、1919年11月・12月と1920年1月に自身所有のBIC株1,341株を売却（一株当たり626フラン）して総額83万9879フランを得た。そして、1920年2月25日に第二回目増資の新株を1,125株応募したので、A. ベルトロの借方勘定は46万6875フランとなった。1920年4月3日に旧株に関する1万株引受権〔droits de souscription〕を譲渡して、43万フランを得た。これらの取引によって、彼の取引勘定は最終的には次のような結果——A. ベルトロの803,004フランの貸越額——となった（表8参照）。「参考として注目すべきは、1921年2月にA. ベルトロはBIC株250株を売却して、同年8月に、取引勘定が釣り合うように、インドシナ銀行株を250株購入した」とセーヌ軽罪裁判所〔Tribunal Correctionnel de la Seine〕の専門家が主張していたが、実際は、A. ベルトロがライバル銀行のインドシナ銀行株250株を購入したのは1年前の1920年8月11日であった⁵⁷⁾。

表8 BIC頭取A. ベルトロの第二回目増資前後の株取引の取引勘定

貸方〔Crédit〕：1,341株の売却	839,879フラン
新株引受権の譲渡	430,000フラン
	1,269,870フラン
借方〔Débit〕：新株1,125株応募	466,875フラン
貸越額〔Solde créditeur〕	803,004フラン

〔Source : Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l’Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 26 ; Rapport d’André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 86〕

一方、1921年にBICの財務状況を調査した大蔵省会計検査官アンドレ・ポワソン〔André Poisson〕は、何人かの広告業関係応募者を取りわけ厳しく非難した（表7参照）。なぜなら、「それほど多くの流動資産〔disponibilités〕を保有している状況にない」人たちがBICの増資の際に応募していたが、1920年12月におけるBICの大口債務者〔les plus gros débiteurs〕の中にその同じ人たちを見出すことができるからである。A. ポワソンは、それぞれの応募株式の未払い〔未払込み〕状態にあることをほのめかして、モーリス・ミニヨン〔Maurice Mignon〕⁵⁸⁾（250株）、ジョルジュ・マンシェ〔Georges Manchez〕⁵⁹⁾（100株）、アンリ・ド・サン＝タルバン〔Henri de Saint-Albin〕⁶⁰⁾（125株）、レオン・レニエ

〔Léon Rénier〕⁴¹⁾ (200株)、レイモン・ルクーリ〔Raymond Recouly〕⁴²⁾ (21株)ら5名の広告業者〔publicistes〕を名指して非難したのである⁴³⁾。

最後に、第二回目増資後(1920年)のBICの主要大株主の名簿と保有株数——不正確であるが——を提示してみよう(表9参照)。第一回目、第二回目と増資の度ごとにBIC株を買い増して、新たな大株主として、フランス中央銀行〔BCF〕、イタリア商業銀行〔BCI〕、S. ヴァン・ダイク〔S. Van Dyck〕、工業輸出会社〔Société d'Exportation Industrielle〕などと共に、J. ペルノット、エピヴァン・ド・ラ・ヴィルボワネ〔A. Espivent de la Villesboisnet〕、A. ベルトロ、バジル・アダン〔Basile Adam〕、キャラリ・ド・ラマズィエール〔R. Calary de Lamazière〕、ピエール・ボレル〔Pierre Borel〕、フランツ・コーリ〔Frenz Kohly〕などBICの経営陣・直接関係者が登場しているのが注目される。

表9 BICの主要大株主(1920年)

株主	保有株数
Gouvernement Chinois	100,000
Péking Syndicate	17,702*
Banque Centrale Française	14,964*
Banque Commerciale Italienne	9,485
S. Van Dyck	6,060*
J. Pernotte (Directeur Général de la BIC)	4,562*
Société d'Exportation Industrielle	2,500
Comte Eugène Mathéus	1,641
A. Espivent de la Villesboisnet (Administrateur de la BIC)	1,303
René Drouhot (banquier à Dijon)	1,183
Léa Lemoine	1,100
Charles Vairon	1,082
A. Berthelot (Président de la BIC)	1,000
Société Maritime et Commerciale de France	1,000*
Basile Adam (Directeur Shanghai de la BIC)	806*
A. Gallusser (Administrateur délégué de la SMCP)	788*
R. Calary de Lamazière (Administrateur de la BIC)	753
Pierre Borel (Directeur Paris de la BIC)	558*

Camille Aymard	500
F. Kohly (Directeur Siège Social de la BIC)	500*
Paul Ville	500
Divers (1)	132,013
Total	300,000

(1) 株式は非常に数多くの株主に分散されている。数千の株主は 25 株以下の所有者である。

(* : その保有株数に疑問符が付され、その数値が不正確であることが示唆されている。)

[Source : Principaux Actionnaire 《BIC, Agence de Paris》, AHCA (CL-Agricole), FBI, 439AH938]

このように BIC は大戦後相次いで大規模な増資（1919 年 4 月の第一回目、1920 年 2 月の第二回目）を行ったにも拘らず、BIC 取締役会はすぐさま第 3 回目の増資の準備に取り掛かった。1920 年 5 月 14 日の BIC 取締役会は、新たに 20 万株の新株を発行することによって、資本金を 1 億 5000 万フランから 2 億 5000 万フランに増額することを決定した。当時の高騰していた BIC の株式相場を見込んで——1920 年 4 月～5 月に 1,120 フラン（表 4 参照）——、BIC 取締役会は発行新株の一株当たりの価格を 825 フラン（発行プレミアムを 325 フラン）と設定し⁶⁴⁾、応募時の 1 株当たりの払込額を 575 フラン——新株の二分の一の払込みで 250 フラン、一株当たりの発行プレミアムで 325 フラン——と決定した⁶⁵⁾。この第三回目の増資は、BIC に新たに 1 億 1500 万フラン——新株（20 万株）の二分の一払込みで 5000 万フラン、発行プレミアムで 6500 万フラン——もの巨額資金をもたらす筈であった。それゆえ、BIC は、1920 年 5 月初頭から、この増資（発行）に着手する許可をフランス蔵相（François-Marsal）に求めたのである⁶⁶⁾。ケ・ドルセによると、BIC による新たな増資の要請は、「銀行取引の飛躍的發展、アジア、アメリカ、ヨーロッパにおいて計画中の多数の支店開設、多数の商工業事業への重要な資本参加・融資」⁶⁷⁾などを動機とするものであった。「BIC の活動〔activité〕と極東におけるフランスの影響力の拡大に果たした BIC の役割の重要性」⁶⁸⁾を考慮して、1920 年 5 月 17 日に首相兼外相 A. ミルラン〔A. Millerand〕はこの請願に「全面的に賛成の意見〔un avis entièrement favorable〕」を蔵相に伝えたが、この増資は、1920 年下半年からの恐慌到来による BIC の経営危機などで、結局、実現には至らなかったのである。

第三節 銀行内部組織の変容

第一次大戦勃発以来、BICの取締役会の構成には大きな変化は殆どなかった。ただし、1916年3月24日に北京シンジケート社長のリチャード・デイヴィス・オウドリ卿〔Sir Richard Davis Awdry〕が健康上の理由で取締役を辞任したので、同じ北京シンジケートを代表したイギリス人のトーマス・バルソン〔Thomas Barson〕が1916年7月から取締役会に加わった。T.バルソンは常に極東に居住していたので、パリでのBIC取締役会には全く出席しなかった⁴⁸。また、1915年4月23日から、中国政府の公式代表として、Tai Ming Fou が取締役会に参加していた。

次いで、BICの組織に起こった大きな変化は、イタリア商業銀行〔Banca Commerciale Italiana, BCI〕を代表して、仏伊南米銀行〔Banque Française et Italienne pour l'Amérique du Sud, 通称 Sudaméris〕⁴⁹代表取締役のジュゼッペ・ツッコリ〔Giuseppe Zuccoli〕が、1918年10月からBICの取締役会に加わったことである。

こうして、戦後のBIC取締役会の構成は次のような布陣となった（表10参照）。

表10 中国興業銀行〔BIC〕取締役会の構成（1918～1920年）

役員名	役職名	その他の役職、職業
André Berthelot	Président	Sénateur, P.-A. D. de la Société Parisienne
Liao Sze-Kong [廖世功]	Vice-Président	représentant du Gouvernement chinois
Eugène Henry	Vice-Président	Ad ^f de la Banque Centrale Française (BCF)
Thomas Barson	Administrateur	représentant du Peking Syndicate (PS)
Joseph Lose	d ^o	P.-A. D. du Crédit Français (CF)
Justin Perchot	d ^o	Sénateur, entrepreneur de Travaux Publics
Paul Chautard	d ^o	ancien député, ingénieur-industriel
René de Cérenville	d ^o	maison Berthoud, Courvoisier et Cie
E. de la Villesboisnet	d ^o	Armateur, Maire et Conseiller général
Calary de Lamazière	d ^o	Avocat, fils d'Alfred Calary (député)
Georges Ballu	d ^o	neveu de T. Ballu (archi ^{te}), ami d'A. Berthelot
Antoine Frézouls	d ^o	ancien inspecteur général des Colonies
Gérard de Ganay	d ^o	représentant de la maison Schneider et Cie
Giuseppe Zuccoli	d ^o	représentant de la BCI
Tai Ming Fou	d ^o	Délégué Officiel du Gouvernement Chinois
A.-J. Pernotte	D ^f Général	ancien directeur de la Banque de l'Indochine

〔Source : AN, 65AQ, A366¹⁻² (Banque Industrielle de Chine) ; "L'Activité Française et Etrangère" de février 1922, AHCA (CL-Agricole), FBI, 439AH944 から作成〕

G. ツッコリをBICに派遣したイタリア商業銀行〔BCI〕は、1920年2月のBIC第二回目増資の際にも3,624株を応募し、合計9,485株を保有する大株主の一人としてBICの経営にも大きく関与して行くこととなるので、ここで同行の沿革を概観してみよう。

イタリア商業銀行〔BCI〕は、イタリアにおけるドイツの経済進出のための一大機関として、1894年10月10日に資本金2000万リラ〔lire〕（額面500リラの株式4万株）でミラノ〔Milan〕に設立された。BCIの株式資本金2000万リラ（4万株）は、次のように引き受けられた（表11）。

表11 イタリア商業銀行〔BCI〕の創立者と応募株数（1894年）

応募者	応募株数	金額（リラ）
Berliner Handels Gesellschaft -Berlin-	5,256	2,625,000
Deutsche Bank -Berlin-	5,256	2,625,000
Bank für Handel und Industrie -Berlin-	5,256	2,625,000
S. Bleichröder -Berlin-	5,256	2,625,000
Direction der Disconto-Gesellschaft -Berlin-	5,256	2,625,000
Dresdner Bank -Dresden-	5,256	2,625,000
Sté I. R. Priv. Autrichienne de Crédit pour le Commerce & l'Industrie -Vienne-	5,256	2,625,000
Basler Bankverein -Bâle-	1,000	500,000
Union Financière de Genève -Genève-	1,000	500,000
Société de Crédit Suisse -Zurich-	1,000	500,000
Comte Alphonse Sanseverino Vimercati, Président de la BCI	200	100,000

〔Source.: [Note sur la] Banca Commerciale Italiana-Comit-Milano, Archives Historiques de BNP Paribas, PTC/743/1 (Banca Commerciale Italiana, 1894-1965)〕

ドイツの六大銀行がBCI資本金の79%（31,536株）を出資して、BCIは文字通りイタリアにおけるドイツの一大機関となった。BCIは、創業間もなく多数のイタリア産業企業を支配下に収めて、イタリアの政治や経済に多大な影響力を有するイタリア第一の事業銀行へと発展した。フランス資本（パリバ）は、1899年4月や1900年4月などの増資の度に大量の新株を取得してBCIへの浸透を開始した。BCI経営陣においても、1899年にはパリバからユーゴ・フィナリ〔Hugo Finaly〕——後のパリバ総支配人オーラス・フィナリ〔Horace Finaly〕の父、オーラス・フィナリは引退した父を継承して1912年にBCI

取締役となった——、エドゥアール・ネツラン [Edouard Noetzelin]、エドガー・ステルン [Edgard Stern] の三名を、1900年にはパリバ総支配人ジョゼフ・アンリ・トール [Joseph Henri Thors] をBCI取締役会に派遣することができた。さらに、フランスは、1905年から第一次大戦勃発に至るまで、パリバヤソシエテ・ジェネラルを介して、BCI指導部への影響力を一段と強めていった。それに伴って、フランスのパリバヤソシエテ・ジェネラルとイタリアのBCIとの連携事業 [collaboration] も増加していった⁵⁹。だが、BCIの資本金が1億5600万リラに達した1914年においても、ドイツはもはや少数の株式しか保有していなかったにも拘らず、BCI取締役会におけるドイツの支配が依然として継続していた。実際、当時のBCIの総株式数31万2000株のうちドイツ人は僅か7,411株 (2.4%)しか保有していなかったのに対して、イタリア人は19万5540株 (62.7%)、スイス人は6万4907株 (20.8%)、フランス人は4万2922株 (13.8%)を保有していた。ところが、BCIの取締役会においては、ドイツは依然として11名もの取締役を有していたのに対して、イタリアは17名の取締役、スイスは3名の取締役、フランスは4名の取締役 (E. Stern, J. H. Thors, A. Turrettini, H. Finaly—全てパリバの幹部要職者—) を派遣していたのである⁶⁰。第一次大戦中は、仏伊接近の動きを利用して、フランスはイタリアからドイツの利益を排除するのに専心した。だが、そのフランスも1915年にBCI頭取の要請によりフランス人取締役4名全員が辞職を余儀なくされた。

パリ駐在イタリア大使は、中国興業銀行 [BIC] の事業における仏伊金融協力 [coopération financière franco-italienne] について、1922年7月に次のように説明した。「BCIとドイツ金融界を結びつけていた絆が緩んだ結果、イタリア金融界とフランスの銀行との間に存在していた唯一の連携をフランスで拡大・強化することが必要であった。この連携は、現在の頭取S. デルヴィレ [Stéphane Dervillé]⁶¹と仏伊の傑出した人物で構成された取締役会の率いるBCIによって現実のものとなった」⁶²。そして、「パリ経済界で獲得した高い地位、戦時中にフランス国家に対して行われた諸サービス、BCI諸支店の活動、BCI事業の繁栄などによって、BCIは仏伊連携の強力な媒介手段 [instrument] となった」。「BCIにおいて幸運にも成功した仏伊連携の手法 [formule] を極東にも適用するよう試みられた結果、BCIはBICへの投資を行ったのである」⁶³と。かくして、BCIの公式の代表としてBICに送り込まれたのがイタリア人のG. ツッコリであった。

1918年のBIC取締役会に初めて出席したとき、G. ツッコリは、早くも「賛同できないほど急激な（BICの）拡張〔expansion〕」⁵³に異議を表明し、この件で（BICの）「危険と思われるほどの大胆さ〔hardiesses〕」⁵³を指摘した。そして、1919年1月17日の取締役会では、「すべての増資に先立って、既存の株式の全額払込を要請するのが望ましいこと、フランスの大預金銀行からの支援を獲得する機会を捕えることが望ましいこと」⁵⁴との意見を表明した。

BIC総支配人J. ベルノットは、G. ツッコリの忠告に従って、1919年3月に再度パリの大銀行の協力を得ようと試みたが、奏功しなかった。すなわち、「私は第一回増資をめざしてパリの大銀行二行と接触した。二銀行はこの取引に関心を示した。われわれの交渉は順調に進んでいたが、ある日、突然破談となった。後に、二銀行の支配人は、インドシナ銀行が介入して差控えることを強要したことを私に告白した」⁵⁵。結局のところ、ライバルのインドシナ銀行による容喙などでフランスの大銀行の支援が得られないことが、常にBICの肩に重くのしかかっていたのである。

それにも拘らず、上述したように戦後BICは世界中に支店網を拡張し続け、1920年上半期には、支店数25店舗、100人以上の代理人〔fondés de pouvoirs〕、2000名以上の雇用人〔employés〕、3万以上の顧客を擁するまで発展したのである⁵⁶。しかしながら、BICの組織のこのように急激な拡張によって、大蔵省会計検査官アンドレ・ポワソン〔André Poisson〕から、BICの支店長〔directeurs d'agences〕や幹部〔haut personnel〕の募集〔recrutement〕については、「古い銀行が厳しく選別した伝統的幹部職の中に見出すような専門的技術の訓練〔formation technique〕や厳格な規律〔stricte discipline〕を備えているという保証はない」⁵⁷、と指摘されることになった。後になって、BICはA. ポワソンの指摘した過ちを自ら認めることになる。すなわち、1921年7月25日のBIC株主総会で、BIC取締役会は「過ち〔erreurs〕はいくつかの支店で犯された。支店網のあまりにも急激な拡大は、多くの場合フランスの経済発展のためであったとはいえ、十分に養成されたスタッフを揃える前に、ときには支店を創設するに至らしめた。」⁵⁸と表明したのである。

注

- (1) AG de la Banque de l'Indochine du 26 mai 1920, AN, 65AQ, A628² (Banque de l'Indochine).
- (2) Rapport du Conseil de la BIC du 19 juillet 1918, reproduit dans "*Agence économique et financière*" du 20 juillet 1918, AN, 65AQ, A366¹ (BIC).
- (3) A.-J. Pernotte, *Pourquoi et Comment fut fondée la Banque Industrielle de Chine*, Paris (Jouve), 1922, pp. 47-48. シベリア干渉戦争に関係してフランス政府に要請され、BICは1919年にウラジオストックにも支店を開設したが、当該戦争の敗北で同支店は間もなく閉鎖されることになる。Cf. "*Information*" du 7 août 1919, Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC, du 31 mai 1923, reproduite dans "*Nouvelles Economiques et Financières*", pp. 1-28 (notamment p. 22), AN, 65AQ, A366² (BIC).
- (4) A.-J. Pernotte, *Pourquoi et Comment fut fondée la BIC*, op. cit., p. 48.
- (5) "*Agence économique et financière*" du 29 mars 1920 et "*Agence Fournier*" du 30 mars 1920, AN, 65AQ, A366² (BIC).
- (6) A.-J. Pernotte, *Pourquoi et Comment fut fondée la BIC*, op. cit., p. 49.
- (7) Ibidem, pp. 50-51.
- (8) Ibidem, p. 49.
- (9) "*Agence économique et financière*" du 11 juin 1920 et "*Agence Fournier*" du 12 juin 1920, AN, 65AQ, A366² (BIC).
- (10) A.-J. Pernotte, *Pourquoi et Comment fut fondée la BIC*, op. cit., pp. 49-50.
- (11) Ibidem, p. 51.
- (12) Ibidem, p. 50 ; AG de la BIC du 30 septembre 1922, AEF, B31603 (Correspondance, No 510bis).
- (13) A.-J. Pernotte, *Pourquoi et Comment fut fondée la BIC*, op. cit., pp. 51-52 et 88-89.
- (14) AG du Comptoir National d'Escompte de Paris du 4 avril 1905, du 20 avril 1920 et du 28 avril 1921, AN, 65AQ, A801¹ (CNEP) ; Alfred Pose, *La Monnaie et ses Institutions*, tome II, Paris, 1942, pp. 540-542. 他方で、パリ国民割引銀行は、クレディ・リヨネのように、地方の人々への接近と証券販売の可能性を拡大するために、フランス国内での支店網の拡張を加速化したのである。
- (15) AG du Comptoir National d'Escompte de Paris du 20 avril 1920, AN, 65AQ, A801¹ (CNEP).
- (16) "*Agence économique et financière*" du 20 juillet 1918, AN, 65AQ, A366¹ (BIC) ; Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 2.
- (17) Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 2 ; Dépêche de L. L. Klotz, ministre des Finances, à S. Pichon, ministre des Affaires Etrangères, du 24 janvier 1919 et Dépêche de Pichon à Klotz du 27 janvier 1919, MAE(SE, AO), Chine, vol. 101, folio 121.
- (18) 創業株式資本の三分の一(3万株)を保有してBIC最大の株主であった中国政府は、1917年12月の二回目の四分の一払込み要請に対して、1918年3月20日にBICの貸方勘定〔compte créditeur〕——「たばこ税収入を追加担保にした金7% 欽滄債〔Bons Or 7% Ching-Yu〕をBICが1917年10月2日に割引くことからもたらされた1125万フラン」のなか——から375万フランを差引くことで支払った。そして、2万株を応募した第一回目増資の際には、中国政府は、様々な貸方勘定〔divers comptes créditeurs〕からの100万フランと1919年金5% 欽滄債〔Bons Or 5% Ching-Yu, 1919〕による430万フランの計530万フランを、1919年1月29日にBICに支払った。中国政府によるこの応募払込みは、1919年5月19日のBIC株主総会で確認された。Cf. Lettre de G. Maspero, président de la BIC, à M. Poincaré, président du Conseil et ministre des Affaires Etrangères, du 9 janvier 1923, MAE(SE, AO), Chine, vol. 387, folio 192.
- (19) フランス中央銀行〔BCF〕は、1905年12月にレオン・ヴォワラン〔Léon Voirin〕、レオン・ド・モントルイユ〔Léon de Montreuil〕、ベルナール・ヴァン・ヴェールセン〔Bernard van Veersen〕

らによって、資本金 300 万フランの事業銀行としてパリに設立された。1913 年の BIC 設立に際して、Ch. ヴィクトール・グループの一員として 4,000 株（株式総数の 4.4%）を取得し、BIC 取締役会に BCF 取締役のウジェヌ・アンリ [Eugène Henry] (BIC 副頭取) と Ch. ヴィクトール [Charles Victor] の二人を送り込んだ。BCF は、Ch. ヴィクトールの信用補助会社 [Société auxiliaire de crédit, SAC] と連携して活動していたが、1914 年 1 月の Ch. ヴィクトール (信用補助会社) 破綻後、1914 年 5 月に BCF 元頭取レオン・ヴォワラン [Léon Voirin] の仲介で SAC (Ch. ヴィクトール) から大量の BIC 株を譲り受けて BIC 第三位の大株主となった。BCF の詳細は後述する。Cf. AN, 65AQ, A97 (Banque Centrale Française) ; Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 125.

- (20) 香水取引や在庫処分業 (affaires de parfumerie et de liquidation de stocks) を営んでいた大投機家 [gros spéculateur] のサロモン・ファン・ダイク [Salomon Van Dyck] は、あらゆる商品の輸出入、とりわけワインと蒸留酒 [alcools] の輸出入に従事していた。1920 年頃は戦時中に財を築いた大資産家通っていた。会計検査官 [inspecteur des Finances] アンドレ・ポワソン [A. Poisson] の分析によれば、「S. ファン・ダイクは、[オリーブなど] 油脂用種子や蒸留酒の投機家であると同様に、バカラの賭博者 [joueur de baccarat] としても知られている」。Cf. Rapport d'André Poisson sur la BIC (déposé le 22 juillet 1921) pour le ministère des Finances, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 64-161(notamment 84) ; Situation de l'Agence de Paris [de la BIC] au 31 décembre 1920 (Risques de portefeuille par Cédant), AHCA (CL-Agricole), FBI, 439AH938.
- (21) Lettre de Hoo Wei Teh à S. Pichon du 14 avril 1919, MAE(SE, AO), Chine, vol. 101, folio 131.
- (22) Dépêche de S. Pichon à L. L. Klotz du 21 avril 1919, MAE(SE, AO), Chine, vol. 101, folio 132.
- (23) Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 2 ; Lettre de G. Maspero à M. Poincaré du 9 janvier 1923, MAE(SE, AO), Chine, vol. 387, folio 192 ; "Actualité financière" du 30 janvier 1920 et "Vie financière" du 11 février 1920, AN, 65AQ, A366² (BIC).
- (24) "Actualité financière" du 30 janvier 1920 et "Cote du jour" du 28 avril 1920, AN, 65AQ, A366² (BIC).
- (25) "Cours de la Banque et de la Bourse" du 21 octobre 1919, AN, 65AQ, A366² (BIC).
- (26) "Le Comptant" du 19 mai 1920, AN, 65AQ, A366² (BIC).
- (27) BIC の発展は、第一次大戦によるドイツ企業の排除と 1917 年 (ロシア革命) 後中国市場からのロシアの撤退 [消滅] によって、部分的に助長された。
- (28) A.-J. Pernotte, *Pourquoi et Comment fut fondée la BIC*, op. cit., p. 53 ; Note de Ph. Berthelot du 23 janvier 1921, MAE(SE, AO), Chine, vol. 102, folio 34-35 ou MAE(AP), Papiers Millerand, vol. 8, folio 11-12.
- (29) AG ordinaire et extraordinaire de la BIC du 25 juillet 1921, AEF, B31601(BIC, Correspondance, N°146) ; AN, 65AQ, A366¹⁻²(BIC) ; Rapport de Jules Jeanneney au Sénat du 16 février 1922 (N° 99), MAE(SE, AO), Chine, vol. 99, folio 146-166. (notamment 151-152).
- (30) Résultat des Agences pour le 1^{er} semestre 1920, AHCA (CL-Agricole), FBI, 439AH949 ; André Bureau, *La Crise bancaire en 1921-23. Etude juridique et politique de l'intervention de l'Etat*, (Thèse pour le Doctorat), Paris, 1923, p. 13.
- (31) "Cote du jour" du 28 avril 1920 et du 3 juin 1920, "Information" du 7 février 1921, "Activité Française et Etrangère" du 1^{er} 15 avril 1922, AN, 65AQ, A366²(BIC).
- (32) Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 4.
- (33) Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 2 ; "Vie financière" du 11 février 1920 et du 8 mai 1920, AN, 65AQ, A366¹ (BIC).
- (34) Lettre de G. Maspero à M. Poincaré du 9 janvier 1923, MAE(SE, AO), Chine, vol. 387, folio 192.
- (35) より詳細な BIC 第二回目増資の主要応募株主名簿は、篠永宣孝『フランス帝国主義と中国』春風社、2008 年、(pp. 062-065) 参照。BIC 総支配人 J. ペルノットの応募株については、彼が第二回

- 目増資に応募した 6,886 株のうち 2,300 株を後に不正に譲渡したと言われている。Cf. Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., pp. 4 et 6.
- (36) “*Commentaires*” du 5 juin 1923, AEF, B31595 (BIC, Presse) ; Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., pp. 2-6.
- (37) Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 26 ; Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 86.
- (38) モーリス・ミニヨン [Maurice Mignon] : 金融広告の最も影響力のある配信者の一人。クエンジ通信社 [Agence Kuenzi] の共同経営者で、鉄鋼協会 [Comité des Forges] やフランス海運協会 [Comité des Armateurs de France] などを代弁していた。【ボネ・ルージュ [Bonnet Rouge]】編集者、【レピュブリック [République]】紙代表であったエミール・ロッシュ [Emile Roche]、【ル・プチ・ジュルナル [Le Petit Journal]】のルイ・ルシェール [Louis Loucheur]、ジャーナリストのピエール・ルノワール [Pierre Lenoir] らの友人。Cf. J.-N. Jeanneney, *L'argent cache : Milieux d'affaires et pouvoirs politiques dans la France du XX^e siècle*, Fayard, 1981, pp. 168-169, 254, 262-263 ; “*La Bourse Libre*” du 30 avril 1920, “*Les Nouvelles Economiques et Financières*” des 7 et 21 février 1921, AN, 65AQ, A366² (BIC) ; Augustin Hamon, *Maître de la France*, vol. II, Paris, p. 157.
- (39) ジョルジュ・マンシェ [Georges Manchez] : パナマ事件 [scandale de Panama] に巻き込まれた老舗「マンシェ＝メナディエ [Manchez et Meynadier]」商會に属す。近親者に 1878 年創刊の【ル・キャピタリスト [Le Capitaliste]】を主宰していたポール・マンシェ [Paul Manchez] がいる。老練なエコノミストの G. マンシェは、1910 年に【預金と国家の投機 [La Spéculation de l'Épargne et de l'État]】、1918 年に【預金会社と事業銀行 [Sociétés de dépôts et Banques d'affaires]】を著した。Cf. “*Activité Française et Étrangère*” du 1^{er} avril 1923, AN, 65AQ, A366² (BIC).
- (40) アンリ・ド・サン＝タルバン [Henri de Saint-Albin] : 【賛成と反対 [Le Pour et le Contre]】紙を主宰していた。
- (41) レオン・レニエ [Léon Rénier] (1857-1950) : 金融広告界の大立者。アヴァス通信社 [Agence Havas] 取締役の L. レニエは、第一次大戦直後、金融商業広告を独占するために、パリの五大紙——*Le Petit Parisien*, *Le Journal*, *Le Matin*, *Le Petit Journal*, *L'Echo de Paris*——による企業連合 [consortium] を結成した。1920 年にレニエは彼の広告一般会社 [Société générale d'annonces] をアヴァス通信社に合併し、1924 年にアヴァス通信社長に就任した。Cf. J.-N. Jeanneney, *L'argent cache*, op. cit., p. 254 ; Raymond Manevy, *La Presse de la III^e République*, Paris (Joseph Foret), 1955, pp. 166 et 183-184 ; Patrick Eveno, *L'argent de la presse française des années 1820 à nos jours*, Paris (Editions du CTHS), 2003, pp. 82-83 ; Augustin Hamon, *Les Maîtres de la France, tome II*, Paris, 1937, pp. 114-120 ; Jacques Henno, *La presse économique et financière*, Paris (PUF), 1993, pp. 18-26.
- (42) レイモン・ルクーリ [Raymond Recouly] : フランス・アカデミーのマルセル・プレヴォー [Marcel Prévost] (1862-1941) と共に、【ルヴュー・ド・フランス [Revue de France]】を創刊し、数多くの時事文献を執筆した。他方、彼はパリ常駐ロシア蔵相代理人の A. ラファロヴィッチ [A. Raffalovitch] の書簡において、ロシア皇帝に雇われた秘密工作員 [agent secret] として登場している。Cf. Augustin Hamon, *Les Maîtres de la France, tome II, Paris*, 1937, p. 184 ; Arthur Raffalovitch, *L'Abominable vénalité de la presse française*, librairie du Travail, 1931.
- (43) Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, op. cit., folio 68-70.
A. ポワソンの報告書の抜粋が後に諸新聞によって報道されると、ポワソンに非難された人たちはそれぞれにこうした「中傷 [diffamation]」に反駁した。Cf. “*Activité Française et Étrangère*” du 1^{er} avril 1923 et “*Les Nouvelles Economiques et Financières*” du 27 mars 1923, AN, 65AQ, A366² (BIC).
- (44) BIC 株式相場の上昇は、ある程度、1918 年期の配当金支払い——普通株一株当たり 25 フラン、発起人株一株当たり 87.50 フラン——や 1919 年期の配当金支払い——普通株一株当たり 35 フラン、発起人株一株当たり 250 フラン——のニュースによって誘発された。Cf. Rapport de Guillaume

- Poulle, sénateur, au Sénat du 23 juin 1922, MAE(SE, AO), Chine, vol. 100, folio 255-263 (notamment, 257 et 262).
- (45) Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 21 ; Lettre de la BIC à François-Marsal, ministre des Finances, du 6 mai 1920, MAE(SE, AO), Chine, vol. 93, folio 14-16.
- (46) Lettre de la BIC à François-Marsal du 6 mai 1920, MAE(SE, AO), Chine, vol. 93, folio 14-16 ; Dépêche de François-Marsal à A. Millerand, président du Conseil et ministre des Affaires Etrangères, du 11 mai 1920, ibid., vol. 101, folio 161.
- (47) Dépêche d'A. Millerand à François-Marsal du 17 mai 1920, MAE(SE, AO), Chine, vol. 101, folio 162.
- (48) "Moniteur des tirages financiers" du 29 juin 1916 et "Agence Economique et Financière" du 30 juin 1917, AN, 65AQ, A366¹ (BIC) ; Note remise par l'Ambassade d'Italie du 27 juillet 1922, MAE(SE, AO), Chine, vol. 385, folio 50-52.
- (49) 仏伊南米銀行 [Banque Française et Italienne pour l'Amérique du Sud, 通称 Sudaméris] : 仏伊南米銀行は、フランスのパリバ [Paribas]、ソシエテ・ジェネラル [SG] とイタリア (ミラノ) のイタリア商業銀行 [Banca Commerciale Italiana] によって、1910年に資本金2500万フランで設立された。仏伊南米銀行は、1900年サンパウロに設立の伊伯商業銀行 [Banca Commerciale Italo-Brasiliano] ——1906年以来イタリア商業銀行と緊密な関係を結んでいた——の事業を継承し、「南米でフランスとの商業事業関係を育成し拡張する」ことを目的としていた。創業以来、南米での金融活動で大きな成功をもたらした。Cf. AG de la BPPB [Paribas] du 16 mai 1911 et du 7 mai 1912, AN, 65AQ, A809¹(BPPB) ; Frédéric Mauro, "Les investissements français en Amérique latine au XIX et XXème siècles", dans Maurice Lévy-Leboyer (éd.), *La Position internationale de la France*, Paris, 1977, pp. 193-202 ; E. Kaufmann, *La Banque en France*, Paris, 1914, pp. 126 et 191 ; *PARIBAS 1872-1972*, Paris, SDE, 1972, p. 80 ; Eric Bussière, *Paribas 1872-1992, l'Europe et le monde*, Antwerp, Fonds Mercator, 1992, pp. 55-56 ; AN, 65AQ, A26^{1,2} (Sudaméris).
- (50) パリバ=ソシエテ・ジェネラルとBCIの連携の一例を挙げると、ソシエテ・ジェネラルは、1911年にパリバとBCIの協力によって、チュニスに資本金500万フランの北アフリカ・ソシエテ・ジェネラル銀行 [Société Générale de l'Afrique du Nord] を設立した。Cf. *La Société Générale 1864-1964*, Livre-anniversaire, 1964, p. 91 ; J. E. Favre, *Le Capital Français au Service de l'Etranger*, Paris, 1917, pp. 21-23.
- (51) [Note sur la] Banca Commerciale Italiana-Comit-Milano, Archives Historiques de BNP Paribas, PTC/743/1 (Banca Commerciale Italiana, 1894-1965) ; Etude 1902 (Banca Commerciale Italiana, Membres du Conseil d'Administration) de septembre 1902, Banca Commerciale Italiana (Renseignements Généraux Extraits des Rapports) et Banca Commerciale Italiana (Renseignements puisés dans les Rapports, concernant les participations financières de cette Banque), AHCA(CL-Agricole), FCL, DEEF40417(BCI, Milan) ; Pierre Milza, "Les relations financières franco-italiennes pendant le premier conflit mondial", dans J. Bouvier et R. Girault (éd.), *L'impérialisme français d'avent 1914*, Paris (Mouton), 1976, pp. 272-302 ; P. Milza, "Les relations financières franco-italiennes au début du XXème siècle", dans M. Lévy-Leboyer (éd.), *La Position internationale de la France*, op. cit., pp. 243-249.
- (52) S. デルヴィレ [Stéphane Dervillé] (-1925) : 元セーヌ商事裁判所所長 [ancien Président du Tribunal de Commerce de la Seine]。彼のフランス銀行への協力は、フランス銀行の割引委員会 [Conseil d'Escompte] のメンバーに選出された1889年6月に始まり、1893年1月には監査役 [Censeur]、1909年には工業家として理事 [Régent] (~1925) に任命された。同時に彼は、パリバの取締役・副頭取 (1911~1925)、仏伊南米銀行 [Sudaméris] 取締役 (1920~)、イタリア商業銀行

行〔BCI〕頭取、P. L. M. 鉄道会社社長などを兼務していた。Cf. AG de la BPPB du 16 mai 1911, AN, 65AQ, A809¹ (BPPB) ; *PARIBAS 1872-1972*, Paris (SDE), 1972 ; PV de la Banque de France du 8 octobre 1925, Délibération du Conseil Général de la Banque de France, No. 114, pp. 101-102 ; Gabriel Ramon, *Histoire de la Banque de France*, Paris (Grasset), 1929.

(53) Note remise par l'Ambassade d'Italie du 27 juillet 1922, MAE(SE, AO), Chine, vol. 385, folio 50-52.

(54) Audience du Tribunal Correctionnel de la Seine sur l'Affaire de la BIC du 31 mai 1923, op. cit., p. 26.

(55) A.-J. Pernotte, *Pourquoi et Comment fut fondée la BIC*, op. cit., pp. 87-88.

(56) Ibidem, p. 60 ; AN, 65AQ, A366¹⁻² (BIC) ; Rapport de Jules Jeanneney au Sénat du 16 février 1922 (N° 99), MAE(SE, AO), Chine, vol. 99, folio 146-166, notamment 151-152.

(57) Rapport d'André Poisson sur la BIC du 22 juillet 1921, MAE(SE, AO), Chine, vol. 98, folio 77.

(58) AG ordinaire et extraordinaire de la BIC du 25 juillet 1921, AEF, B31601 (BIC, Correspondance, No. 146).